

26:24 パウロがこのように弁明していると、フェストゥスが大声で言った。「パウロよ、おまえは頭がおかしくなっている。博学がおまえを狂わせている。」

26:25 パウロは言った。「フェストゥス閣下、私は頭がおかしくはありません。私は、真実で理にかなったことばを話しています。」

26:26 王様はこれらのことをよくご存じですので、その王様に対して私は率直に申し上げているのです。このことは片隅で起こった出来事ではありませんから、そのうちの一つでも、王様がお気づきにならなかったことはない、と確信しています。」

26:27 アグリッパ王よ、王様は預言者たちを信じておられますか。信じておられることと思います。」

26:28 するとアグリッパはパウロに、「おまえは、わずかな時間で私を説き伏せて、キリスト者にしようとしている」と言った。

26:29 しかし、パウロはこう答えた。「わずかな時間であろうと長い時間であろうと、私が神に願っているのは、あなたばかりでなく今日私の話を聞いておられる方々が、この鎖は別として、みな私のようになったださることです。」

26:30 王と総督とベルニケ、および同席の人々は立ち上がった。

26:31 彼らは退場してから話し合った。「あの人は、死や投獄に値することは何もしていない。」

26:32 また、アグリッパはフェストゥスに、「あの人は、もしカエサルに上訴していなかったら、釈放してもらえたであろうに」と

言った。

パウロのことばがフェストやアグリッパを動揺させていることが分かります。フェストはパウロの博学や論理性を認めざるを得ませんでした。それを認めると自分がその信仰を認めることになってしまいます。アグリッパも同様で、「…わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている。」と言ったほどです。しかし彼らは、始めからキリスト者になろうとは考えてもいませんでした。

このように多くの人々は、論理的に神の存在を認めざるを得ない証拠があったとしても、始めから否定することを決定して話を聞いているので、論理的には行き詰っていても、なお自分を変えようとしません。生命や宇宙法則の存在原因、また普遍的な価値観というものが必要を認めながら、自分の価値基準は相対的で刹那(せつな)的なものを持ち続けるのです。

フェストやアグリッパの態度は概ねノンクリスチャンの普通の姿と言えるでしょう。しかも福音を、上から目線で「聞いてやる」というような態度の人もいたりします。

パウロはそのような2人に対しても、「まじめ」に、「率直に」、そして愛を持って語っています。「…私のようになったださる」というのは、つまり救われて欲しいということです。

パウロの方が博学でまた論理的であったのですが、彼はそれで相手を論破して勝とうとするのではなく、あくまでも謙遜に愛を持って福音の真理を伝えようとしています。その心に聖霊様が働かれるのです。

①神のみこころは？(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか？(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか？(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか)

④この世にあって何を実践しますか？

